

●東京都町村議会議員講演会（東京都） 浅沼 碧海  
令和8年5月7日 15時00分～17時00分

目的：議員の研修

演題 「議会の災害対応とBCP」

講師 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部まちづくり学科  
教授 鍵屋 一 氏

成果

私たち八丈島においては、2025年10月に発生した台風22・23号を受けての講演であったので、体験者としての視点で終始講演を聞くことができた。

鍵屋氏は『なまはげ』で有名な秋田県男鹿半島の出身で、講演の口調も男鹿半島の秋田弁そのままの語り口。親しみのある終始なごやなかで飽きさせない、聴く側を意識した講演を重ねた人に成せる技といった印象を受けた。

伊豆諸島をはじめとした過去の災害を事例に、

- ・災害時の宿の重要性→スタディーツアーによる訪問、観光消費活動の中核
- ・トイレの重要性→感染症や心理的問題
- ・人口減少、高齢化社会→要介護者を交えた災害対策の重要性
- ・近所づきあい、町内会自治会活動参加への低下
- ・公助の限界
- ・正常化の偏見「自分は大丈夫！」

といった現代の問題を紐解いてくださった。

以下は講演の中で、心に残った箇所をピックアップする。

【なまはげの役割】

ご自身の出身である、過去に起きた男鹿半島の津波被害を事例に、なまはげが現在は（災害）ボランティアの役割を担っていることを教えていただいた。なまはげ台帳（要配慮者情報）を作成し、事前に避難場所の選定、避難路の整備等を行い、災害時には避難支援を行っているとのこと。これも文化や地域のつながりを活かした仕組みづくりからなせる支援である。私たち八丈島も緊急の際に機転を効かし必死に対応を行ったが、仕組み化され、どう対応するかは決まっていたわけではない。事前のシュミレーションや緊急対応時には迷わないようにある程度の計画性を持って対応する重要性を話されていた。そして私たち八丈島や伊豆諸島と通ずる部分では、地域のつながり（人への理解）や文化があることである。自治体や振興委員、団体などある程度のまとまりを持って対応していければ、自助・共助の範囲が広がり、困難者の対応に目が届いていくのではないかと。八丈島でも是非活かしていきたい。

### 【ひなんさんぽ計画】

岡崎市の事例で、ひなんさんぽとは、避難行動要支援者の自宅から避難場所までの経路に危険な箇所がないかを、自治会や民生委員、サポーターと一緒に観察しながら、避難経路を確認する取り組みであり、訓練結果を皆で振り返りを行い、個別避難計画を作成するというものである。振り返り際には美味しい和菓子も必要とのことで、計画そのものよりも計画を作るプロセスでつながりを作る大切さを話されていた。

台風対応時、いかに地域のつながりで情報の収集・伝達が行えるかは身をもって学んだので、誰1人取りこぼすことなく目が行き届くように、地域の協力体制を構築していきたい。

BCPの話においては、

- ・住民の命と尊厳を守ること。
- ・役場、支庁の「じゃまをしない」
- ・危機時の意思決定をあらかじめ伝え、理解を得ておく。
- ・トップとして判断を早くする。
- ・マスコミ等を通じて住民の前に姿を見せ、被災者を励ます。
- ・忙しくても視察を嫌がらずに受ける。
- ・職員を意識的に休ませる。

などの話を伺い、議会運営や応急対策への批判などは行政に強く負担をかけることを改めて教えていただいた。

まずは情報収集を行い、地域支援活動に協力し、国等関係機関への要望活動、視察の受け入れを行うことが、議員のすべきことと話され、私たち自身ができること、できなかったことを反省する良い機会にもなった。

この先、八丈町においても振り返りを行っていく。また住民の皆様においても反省点や改善点、要望といった声も多くあるはずである。

今回の講演を聞き、また発生した台風を経験した八丈島として、私たちにできるより良い未来を作っていけるよう、この講演を活かしていきたい。